

ISSN 2186 – 3989

近代日本社会における「世間」の諸相（その2）
－身分・地域・女性－

板倉 栄一郎

A verification about various aspects “SEKEN” in Modern
Japanese Society(part2)

－ Class Differences, Regional Difference, Gender Differences －

Eiichiro Itakura

北 陸 大 学 紀 要
第56号(2024年3月)抜刷

近代日本社会における「世間」の諸相（その 2） — 身分・地域・女性 —

板倉 栄一郎*

A verification about various aspects “SEKEN” in Modern
Japanese Society(part2)
— Class Differences, Regional Difference, Gender Differences —

Eiichiro Itakura*

Received December 1, 2023

Accepted January 22, 2024

Abstract

With regard to “SEKEN” in modern Japanese society, this paper takes up the theme of “pre-modern traditional communities that have continued to this day”, and draws on the knowledge of history and folklore, from the three viewpoints of class difference, regional difference, and gender difference.

In this context, this paper refers to gender difference and “SEKEN” in the smartphone society. As a result of verification, it became clear that “SEKEN” study is necessary for us to approach from a women perspective in the modern Japanese society.

Key-words : gender difference, old middle class, new middle class

はじめに

第 1 章 「世間学」と身分について

第 1 節 研究史の概観—「世間」の復活か溶解か—

第 2 節 「世間」の身分差—それぞれの「世間」—

* 北陸大学経済経営学部 Faculty of Economics and Management Hokuriku University

第2章 「世間学」と地域について

第1節 民俗学における「世間」－柳田國男が捉えた「世間」－

第2節 「世間学」と歴史学・民俗学－身分・地域・家－

小括1－「世間学」と身分・地域－

(以上、その1：第55号に掲載済)

第3章 「世間学」と女性について

第1節 民俗学における女性－上位層と下位層－

第2節 中間層という存在－旧中間層と新中間層－

(以上、その2：第56号に掲載¹⁾)

第4章 「世間」の変質と現代社会について

第1節 メディア社会と「世間」－テレビからスマホへ－

第2節 “一面性社会”の到来－建前と本音－

おわりに

(以上、その3：第57号に掲載予定)

第3章 「世間学」と女性について

第1節 民俗学における女性－上位層と下位層－

柳田國男や宮本常一の著書には、女性に焦点を当てて論じられている箇所が散見する。両方の著書に共通しているのは、男性と共に労働に励む姿や時として男性が不在になることで生じる不都合を乗り越える姿であって、そこには良妻賢母型の女性の姿を見つけ出すことは難しく、女性の世界にも身分による相違があったことが容易に想像できる。そこで本節では、最初に両氏の各々の女性に関する記述を確認する処から始めたい。

最初に、柳田を取り上げる。「女と労働」(柳田 1976 下:124-131)という一節を設けて、「女は男と共に正式に働いた。」と記す柳田は、「女が働かないで養われているという思想は、ごく良い生活から来たのであって、普通は昔から女性が働くのは当たり前、それに干渉しないということははなはだ稀であった。」と理解している。第1章・第2節で女工について確認したが、柳田の著書では、女工に加えて茶摘み女や海女、行商を論じている。また、職業婦人についても取り上げ、「女工のみならず産業の異常な発達、日清戦争以後漸次労働ないし職業婦人の数を増加していった。」と記す。そして、女性でなければならない仕事も発見されたとして、女教師、看護婦、産婆、電話交換手、女定員を挙げている。

注目したいのは、海女の働きに関する記述である。「海女の働きは驚異であった。磯のできぬすなわち海にもぐって仕事のできぬ女は、はなはだしく軽蔑せられた。朝起きると洗濯や炊事をなし、それから田畑に出て昼から海に行って鮑や海藻を採取し、夕には家に帰って家事裁縫子供の世話から、村の寄り合いや工事に至るまで夫を代表して出るといふ非常な働きに堪え、海に出ている夫を助け一家を支えているのである。夫は終始海にいて世間が判らぬというので、夫人が村会に出席しているところさえもある。」と。この記述は、女性の働きぶりもさることながら、夫は終始働いており、世間のことが判らないので村の寄り合いに女性(主婦)が参加していたことを示すものであり、ここに一家を切り盛りしながら村の寄り合いや工事への参加を通して「世間」と関わりを持つ女性の姿が読み取れる。そして、それは“生きていく”ためであり、そのことから女性－男性よりも－「世間」に深く関わった可能性があることを想起させる。とりわけ、「行商人は昔からどうい

女性が多」く、毎日、七里八里と振り売って歩く女性の姿は生活との関わりの中で外交的な一面を示すものであり、これは自身が生活をする「狭い世間」の領域を超えた「広い世間」を知らなければならないという女性の役割を表している。同時に、この記述から、農村の「世間」とは一味違った漁村の「世間」の在り方が読み取れる。

次に、宮本常一を取り上げる。宮本は、「女の世間」という一節（宮本 2005：105-130）を設けて論じる。その書き出しは、「女はまた、共同体の中で大きな紐帯をなしていたが、それは共同体の一員であるまえに女としての世間を持ち、そこではなしあい助け合っていた。」というものであり、女性は共同体の紐帯としての役割を担うと理解されていたことが判る。この一節には、性に関する話や労働に楽しさを見出す話などが記されており、「世間」と関わろうとする開放的な女性の姿が随所に描かれている。その幾つかを見ておきたい²。

宮本は、「はア、昔にヤア世間を知らん娘は嫁にもらいてがのうての、あれは寵の前行儀しか知らんちうて、世間をしておらんとどうしても考えが狭まうなりますけのう、わしや十九の年に四国をまわったことがありました。」と、旅に出て「世間」を知ることが結婚に繋がることを記している。そして、すでに旅へ出ている朋輩を頼って出ていくのであるが、その際、父親が何も知らない間に母親と申し合わせて出ていくのである。第2章・第2節の〈表〉で、民俗学では西日本は母系制が強いと理解されていることを確認したが、この記述から母親が家庭での実質的な主導権を握っていたことが判る。

一方で、旅に出た娘たちは、旅へ出て外の文化を身につけ、島の人にひけらかすことが娘たちにとっての誇りであることが記されているが、興味深いのは、そうした旅は、見習いの場であると同時に他郷の言葉を身につけることを目的としていたことである。「村へ戻って来ては村の言葉をつかわねばならぬが、一方では場所言葉も十分心得ていて、出るところへ出ればちゃんとした物言いのことができることが、甲斐性のある女としての条件であった。」と、女性が村の言葉と他郷の言葉を時と場に応じて使い分けることが女性の甲斐性であったことが記されており、ここに女性の外交的な一面を見出すことができる。そして、これらの記述は、西日本に限定されるかもしれないが、村が決して閉鎖的なものではなく、外部の文化を受け入れる開放的な性格であったことを示している。このように、女性は労働力であるに加えて村の寄り合いを含めて他郷との付き合いをする際に必要な外交的な要素も兼ね備えていなければならない、これは柳田と同様な指摘である。特に、若い娘が旅をすることが「広い世間」を知る大切な要素であったことを勘案すると、女性は男性よりも深く、かつ広く「世間」と対峙していたに相違ない。

また、宮本は、村内について、「村の隅々までを知っていたのも女性であり、村の情報を隅々まで行き渡らせるのもまた女性であった」、と記す。井戸端会議でそういった情報入手し、ほとんどの話は、村の長老と共に働き、共に苦しんできた仲間として一には話すのだが、自分の亭主にははなさないという。これは村の円満な付き合い方の一つであり、「村の情報を知らない村には住みにくいし、どこまでいっても感情の溶け合うことははい。」と記されているが、ここに村の“生きていく”ための人間関係の处世術が窺え、村内の「狭い世間」に女性が積極的に関わっていた痕跡が見出せる。

因みに、“生きていくため”という視点と女性との関わりについては、1918(大正7)年の夏に勃発した米騒動は見逃せない。富山県の日本海沿岸の中小都市に暮らす女性たちが船で積み出される米を阻止するために集団で役所や詰所に押しかけたのだが、これは男性たちが遠洋漁業に出て“不在”であったため、女性集団が中心となって起こした抗議行動である。その目的はまさしく、“生きていく”ための生活防衛であり³、その態度に下位層の女性の厳しい現実を見ることが出来る。加えて、男性の“不在”に関して、農村部においては農閑期における出稼ぎや売薬、大工や左官職人が全国を渡り歩いた（宮本 2005：230-236）ことなどからすると、下位層においては男性よりも女性が伝統的な「狭い世間」と関わりを持

つ場面が多かったと言えよう。

さて、ここで上位層の女性の「世間」についても確認しておきたい。明治から大正期にかけて女性教育の先駆者として活躍した下田歌子は、1910（明治 43）年に一著を著している⁴。下田の略歴について簡単に記しておくと、美濃国恵那岩村の出身で、明治維新の際に父と祖父が新政府へ出仕したことを受けて自身も東京に出た。そして、1972（明治 5）年に女官として宮中に出仕し、宮廷で和歌を教えるようになった下田は、1893（明治 17）年に皇女教育のために欧米へ教育視察をし、帰国後の 1898（明治 22）年に帝国婦人協会を設立する。その出自や経歴から明らかに上位層に属する。

下田の著書は、国家との関わりの中で上級婦人の教養や心構えについて記されている点の特徴である。すなわち、国家の国民（臣民）として婦人の在るべき姿を“常識”として論じており、それは「国家－家庭」の構図になっているが、その関係には「世間」の構造の中間に位置づけられる共同体という概念がない。そして、人との関わりについては「社交・交際」という言葉で表現し、主婦として母としての社交や交際の必要性を説くだけである。また下田は、「今日では、學校出身の婦人は、家庭には殆ど信用がないやうな有様で、學校出立ての女は、何の役にも立たない、御飯一つも満足には炊かれないうまで云われて居るのは、果たして何故で御座いませう。」⁵と、学問が盛んになると共に常識が却って欠けるようになったと記しており、その解決手段として「家庭にあっては、親や兄妹の側に居つて、何から何までも深き興味を以て研究しなければなりませぬ。」⁶、「何うして常識を養ふかについても、今申した通り、成るべく世の中の實際を見て、生きた學問をするのであります。」⁷と断じており、家庭教育の重要性を指摘している。下位層では若者組や娘組が教育の一端を担ったが、それは共同体の中でのルールや習慣を主に学ぶという特徴があり、ここにも下位層との違いを読み取ることができる。

このように、国家の臣民を前提とした上で婦人としての常識について論じた下田の著書には、下位層の女性に見られるような共同体の中で“生きていくため”の処世術や「広い世間」との関わり方に関する記述は見られない。むしろ、臣民の立場から家庭内の主婦として母としての在り方の大切さを“常識”として論じており、この点に上位層と下位層の女性の典型的な違いを認めることができる。

以上、下位層と上位層の女性の「世間」について考察してきたが、ここまでをまとめると、以下ようになる。第一に、女性にも身分に応じた「女性の世間」が存在し、とりわけ下位層が所属する伝統的な「狭い世間」では、男性よりもむしろ女性に関わる場面の方が多かったと言える。一方で、上位層の「世間」には、国家の臣民という立場から、国家を支える家庭、その家庭をしっかりと維持することが女性の“常識”であるという考え方があり、ここには下位層のような共同体に対する考えは存在しない。第二に、女性は「広い世間」とも関わる外交的な一面があり、それは女性が身につけるべき甲斐性であって、このことは、西日本に関して言えることであるが、「世間」が決して閉鎖的なものではなく、開放的な一面を持っていたと言える。そして、これらのことから、「世間」について論じるに際し、男性の立場から「世間」を論じることに對しては、「世間」の実態により深く迫ることができないという点で限界があり、「世間」に関する解釈も一面的になってしまうことが懸念される。従って、女性が伝統的な共同体の内と外の両方に深く関わっていたことが明らかになったという点で、女性と「世間」という視点からのアプローチも「世間学」には重要であることを主張したい。

処で、本稿では今迄、上位層と下位層の相違について論じてきたが、当然、中間層とされる身分層も存在する。中間層については、「旧中間層」と「新中間層」の二つが存在するので、次節では 2 つの中間層を比較しながら「世間」と女性との関わりを考察したい。

第2節 中間層という存在－旧中間層と新中間層－

最初に、新中間層を確認しておきたい。新中間層は、主に大正期にかけて出現した新しい身分として位置づけられ、時代の変化に伴う身分の変化を象徴的に表す言葉である。新中間層とは、学校教育を通して社会的な地位を獲得した者が構成する家族（主に核家族）のことであり、官公吏・教員・職業軍人・会社員などの俸給生活者を指す。本節では、最初に、新中間層に属するサラリーマン層（会社員）を、次に旧中間層に属する旦那衆⁸を取り上げて考察する。

最初に、昭和初期に流行した2つの流行歌を取り上げる。一つは「うちの女房にや髭がある」で⁹、これは1936（昭和11）年に公開された同名の映画の主題歌であり、東京を舞台に恐妻家のサラリーマンと妻とのドタバタ喜劇が描かれている。歌詞の一番目を挙げる。

何か云おうと 思っても 女房にや 何だか 云えません。そこでつつい嘘をゆう
「なんです あなた」「いや別に 僕はそのあの」
パピプペ パピプペ パピプペポ うちの女房にや髭がある

もう一つは「もしも月給が上がったら」である¹⁰。全4番を挙げる。

- 一、もしも月給が上がったら わたしはパラソル買いたいわ 僕は帽子と洋服だ
*上るといいわね 上るとも いつ頃上るのいつ頃よ そいつがわかれば苦労はない
 - 二、もしも月給が上がったら 故郷（くに）から母さん呼びたいわ
おやじも呼んでやりたいね *
 - 三、もしも月給が上がったら ポータブルなども買いましょう
二人でタンゴも踊れるね *
 - 四、もしも月給が上がったら お風呂場なんかもたてたいわ
そしたら流してくれるかい *
- （*は繰り返し）

この2つの流行歌に共通するのは、いずれも当時のサラリーマンの日常における生活や思いを歌詞にしていることである。女性（女房）が男性（亭主）よりも「強い」というのが共通した特徴であり、特に後者は、女房の「わたしはパラソル買いたいわ」が亭主の「僕は帽子と洋服だ」の前にあり、これは二番目に「故郷（くに）から母さん呼びたいわ」が「おやじも呼んでやりたいね」と同じ関係である。そこに男尊女卑や良妻賢母の姿を確認することは難しい。また、「ポータブル」や「二人でタンゴを踊る」「お風呂場を建てたい」など、外国の影響を受けた文化的な生活を表すフレーズが随所に鏤められていることが特徴的である。更には、月給制であることから、消費生活を夢見る女房とサラリーマンの現実を亭主が「そいつがわかれば苦労はない」というフレーズで締め括る対照的な歌詞の配列に新中間層の現実の姿が窺える。

処で、この二つの流行歌が流行った昭和前期という時代の特徴について、歴史学者の井上寿一は3つに分類して相互の繋がりを指摘する。井上によると、第一に政治・経済・社会・文化のあらゆる分野で日本のアメリカ化が進み、第二に経済のアメリカ化は豊かな社会をもたらす一方で、格差が拡大し、特に農工間賃金格差が1920年前後はほぼゼロであったものが昭和前期には最大2.5倍まで急拡大したこと、そして第三に格差の是正を求めて大衆が立ち上がる大衆民主主義－男子普通選挙制度の実施をきっかけに生まれた民主主義の新しい担い手－が到来した、と論じている¹¹。この井上の指摘から、農工間の賃金格差が生じていたことや、先に確認したような外国文化の影響が確認できるが、とりわけア

メリカ化という視点は無視できない。

社会学者の吉見俊哉は、この点について、1920年代以降、アメリカに対するイメージは、日常的な消費生活の中で広く浸透する源泉となっていくとし、アメリカの生活様式は、東京や大阪といった日本の大都市における中産階級を魅了していくと論じる¹²。第2章・第2節で第一回国勢調査の調査結果を確認したが、核家族化が進行する大都市において中産階級（中間層）が日常生活の中にアメリカ文化を積極的に取り入れていくことを吉見は明らかにしたのである。阿部謹也は、「日本の社会は明治以後に欧米化したといわれている。欧米化とは近代化という意味である。近代化によって日本の社会は国の制度のあり方から、司法や行政、郵政や交通、教育や軍事にいたるまで急速に改革された。服装も変わった。」と論じる（阿部 2006：85）。しかしながら、阿部は、個々の人間や人間同士の繋がりが見えてくる生活文化の具体にまでは踏み込んではいない。「世間」が人と人との繋がりで成り立っていることからすれば、生活文化の細部に踏み込むことは重要な視点である。

吉見の指摘は、生活文化に深く踏み込んであり、この点で有益である。日常生活の中にアメリカ文化が浸透し、生活文化は中間層各々の意識の変化にも影響する。そして、先の小括1で「世間体」について整理したように、“生きていく”ことを左程、真剣に考えなくてもよいような生活を手に入れたことで「世間体」に対する意識や在り方も変わる。また、阿部は、「近代化は全面的に行われたが、それが出来なかった分野があった。人間関係である。親子関係や主従関係などの人間関係には明治政府は手をつけることが出来なかった。その結果、近代的な官庁や会社の中に古い人間関係が生き残ることになった。」とも論じている（阿部 2006：85-86）が、家族の在り方の変化や義理人情に伴う主従関係が時代と共に衰退したことは、第1章と第2章で論じてきた通りである。加えて、官庁や会社といった「狭い世間」を論じることで阿部の「世間学」は成り立っているが、それは主に男性の「世間」であって、前節での「女性の世間」の考察結果からすると、これを「世間学」の一般的見解とすることに対しては、これを一面的であると受け取らざるを得ない。

さて、これまでの考察から、新中間層は上位層や下位層—特に下位層—とは実態的にも異質のものであったことが明らかになった。特に、サラリーマン家庭は女性（主婦）の権限が強いことが特徴であり、これは前節で確認した「女性の世間」と同様である。更に、自説を補強するために次の点にも注目したい。歴史学者のE.H.キモンズによる「サラリーマン層の原型は旧士族身分である」という指摘である¹³。これに従うと、「世間学」には前近代の伝統が残存する可能性があるからである。以下、その可能性について考察したい。

日本文学者の鈴木貴宇は、明治初期の官吏であるサラリーマンに階層分化が進んでいたことを確認する。鈴木によると、初期のサラリーマンは、「高等官＝特権層」と「下級判人官＝貧困層」とに分かれており、特に後者は「腰弁」と呼ばれた“お気の毒な”官吏であったが、彼等こそが大正・昭和を通じて進展する都市大衆化社会で「サラリーマン」と称されることになる一大階層の先祖であると論じる¹⁴。この点については、初期のサラリーマンが経済的に困窮し、質屋通いをしたことが当時の新聞からも確認できる¹⁵。そして、資本主義の発展に伴って主に「官」によって構成されていた初期サラリーマン層の中に「銀行員・会社員」といった「民」に属するサラリーマンが出現したが、これがいわゆる新中間層である。鈴木は指摘を肯定的に受け止めると、高級官吏（洋服紳士）こそが前近代の士族の伝統を受け継いだ者ということになる。

しかしながら、次のことも言える。鈴木も引用するように、日清戦争以降、株式会社の設立の増加に伴い、「能力」を重視する「教育エリート」の需要が高まり、その傾向はサラリーマンだけでなく官吏にも当てはまる。要するに、資本主義の浸透はサラリーマンをして、それまでの身分を重視したものから能力を重視したものに傾斜するのである。そして、同時にそれは、前近代的な士族身分の「世間」を引き継いだ層の「世間」が緩やかに新中

間層の「世間」に変わることを意味する。大正期のサラリーマンは、「腰弁」と呼ばれた旧武士の身分が多くを占めるものではなく、また高級官吏が将来像であった東京帝国大学や京都帝国大学の卒業生たちも会社員を選ぶようになる¹⁷。このことから、「学歴社会」の浸透の影響を受けて、会社員から官吏に至るまでの採用がそれまでの身分重視から能力重視に変化したと言え、伝統的な士族身分の「世間」は、前近代的な「世間」の価値観から新しい「世間」の価値観に次第に凌駕されていくと考えられるのである。

ここで、昭和初期のサラリーマンの実態についても見ておきたい。後に日本経営者団体連盟の理事を務める前田一の著書には、「自序」の冒頭で「サラリマン（ママ）、それは一俸給生活者、一勤め人一高給取り一洋服細人一そして腰弁、一とその名称が何であれ、正体を洗へば、『洋服』と『月給』と『生活』とが、常に走馬灯のように循環的因果関係をなして、兎にも角にも『中産階級』とかいふ大きなスコープの中に祭り込まれている集団を指したものに違ひない」、次いで「苦しい中からも何とか工面しては体面とやらを保っているから」と記されている¹⁸。ここから、サラリーマンが消費社会に飲み込まれながらも何とか「体面」（世間体）を保つことの苦慮している姿が窺える。この点に注目したい。

小括1で、少なくとも下位層の場合、世間体が戦前と戦後では異なり、特に戦後の世間体は“生きていくため”を以前の時代ほど深刻に考えなくても良くなっていった結果、人間の内面に潜む欲望が世間体として表出してきたと論じたが、これは新中間層の世間体と一脈通じるものがある。サラリーマンは、俸給生活者であり、“生きていくため”に共同体に縛られるようなことはない。本節の冒頭に掲げた2つの流行歌の中でも特に後者は、サラリーマン家庭の理想（欲望）と現実とを照射している。このことから、世間体に関しては、新中間層ではすでに“新しい”世間体が出現していたと考えられないだろうか（筆者曰く、便宜上、これを“戦後型”の世間体とする）。更に、戦後の高度経済成長期を契機とした“戦後型”の世間体は、戦後日本の産業構造が第二次産業から第三次産業へと移行するに伴い発生した、“消費”をキーワードとした世間体であり、“生きていくため”の共同体の領域がより狭くなっていく過程で変質した世間体である。そして、それは高度経済成長が終焉を迎えた後も一層、増幅していくのであるが、この現象は「世間」が、理論的には、「狭い世間」がより狭くなり、やがて消滅して家族、そして個人単位に到達するという動きを想起させる。すなわち、高度経済成長期と歩を合わせて出現した個人の欲望を刺激する“戦後型”の世間体は、「狭い世間」がやがて個人単位にまで到達するという動きの中で、高度経済成長が一段落した1970年の半ばから“一人歩き”し始め、それが今現在も尚、続いているのである。そして、そのことは同時に、「世間学」で示される4つの「世間のルール」（贈与・互酬の関係、身分制、共通の時間の意識、呪術性）が機能不全を起こしていくことも又、意味するのである。

さて、次に、旧中間層に属する旦那衆について確認したい。歴史学者の成田龍一は、日露戦争後の1905（明治38）年に勃発した日比谷焼き討ち事件には雑業層と旦那衆と呼ばれる都市民衆が積極的に関与したと論じる¹⁹。雑業層は、人足や車夫、職人など、都市での雑業に関わる層のことである。それに対して旦那衆は、都市において「旧中間層」を形成し、地域の人々（いわゆる雑業層）を雇用し、鳶、左官、大工などの出入りの職人や御用聞きの人を抱え、居住空間では雑業層を店子とする家主のことであり、「短くても数十年、長いものは江戸時代以来の借地に店舗を構え、日本橋、京橋、神田、浅草など（当時の）東京の中心部」で、いわゆる老舗として商工業を営んでいた²⁰。ここに旦那衆と雑業層の上下関係が見られるが、義理人情に基づく関係が時代とともに衰退していったことは、第1章・第2節で確認した通りである。横山源之助は、都市の最下層に位置付けられる細民について、本所・深川を例に江戸時代から他の地区と風習を異にし²¹、職人や日雇いから成り立つことを明らかにした（横山2004：23）。更に、吉見は別著²²で、明治末期に両

地区に工業地帯が形成されたことにより生活構造に変化をもたらしたのではないかと推察する。盛り場を題材にして都市を考察した吉見は、本所・深川で働く労働者はポンポン蒸気と当時呼ばれた定期船に乗って隅田川を渡り「浅草の客」となったとし、これが新たに台頭しつつあった工場労働者の姿であったと論じる²³。そして、関東大震災を機に東京の盛り場は、浅草から銀座へとキャスティングボードを明け渡すようになったとするが、銀座の急激な発展の要因として吉見は、カフェとデパートの大衆化と銀座への進出を挙げる²⁴。ここに、新しい労働階級層の生活の姿と外国文化の浸透が読み取れる。

また、吉見は、浅草が地方から流入した都市下層民を主要な担い手としていたのに対し、銀座はむしろ第一次世界大戦の頃から急速に勢力を伸ばす山の手や郊外の新中間層とその子弟を主要な担い手としていたとし、「下町地区にとって代わるかのように、急速に東京西部及び西南部方面にその範域を拡大させていくのが山の手・郊外の新中間層の居住地域である。」と論じる²⁵。第1章・第1節で関東地方の都市と農村が震災を機に旧来の行きがかりが一掃されたという柳田の記述を確認した（柳田 1976 上：97-98）が、吉見は、「もっとも、旧市域の外部への新中間層の移動は、すでに大正八年頃から始まっており、必ずしも震災後の現象ではない。とりわけ、巢鴨・豊島・新宿・渋谷等の旧市域に直接隣接する地帯では、明治31（1898）年の人口を100とした場合、大正7（1918）年には517と、震災前からかなりの人口増加を見せていた。」²⁶と、人口移動が震災前から既に始まっていたことを明らかにしたのである。

以上、サラリーマンと旦那衆を考察することで新中間層と旧中間層との違いを確認したが、これらのことから次のことが言えるのではないだろうか。第一に、関東大震災以前の大正8（1918）年以降、工場労働者の台頭と外国文化の大衆化、そして盛り場の拠点が浅草から銀座に移動したこと、新中間層の象徴としてのサラリーマンの増加などから、少なくとも東京においては旧中間層の生活文化から新中間層の生活文化に次第に傾斜していったと考えられる。そして、地方においても産業構造の変化の影響と都市化が進むにつれて同じような過程を辿ったと推察できる。第二に、核家族や俸給生活の特徴としたサラリーマン家庭が山の手や郊外に移動したことは、“生きていくため”に共同体に依存する必要がないことから、伝統的な「世間」は山の手や郊外には存在し難いと考えられる。加えて、新中間層の増大は、「戦後型の世間体」の増大を日本社会にもたらしたと考えられる。

最後に、アジア・太平洋戦争期と「世間」について言及したい。戦時期における人と人との繋がりに関しては、町内会や隣組など、国家総動員体制の下で「人と人々が国家の強制によって繋がれた時代」である。また、学童疎開や強制的移住など、他の地域に移動することを余儀なくされた時代でもある。

町内会・隣組は、1940（昭和15）年9月11日付の「部落会町内会等整備要領」（内務省訓令第17号）によって正式に組織化された。その内容は、市町村の下部組織として国策遂行に協力するように義務付けることである。具体的には、隣組会報の回覧による情報の一元化、配給に係る手続き、貯蓄増強に係る割り当て、防空訓練などの各種訓練の実施や各調査の実施などであり、モノを介しての地域における人間関係の相互を統制することであるが²⁷、その一方で、ヒトの出入りを監視するといった性格も持ち合わせていた²⁸。

本稿では、今迄、地域社会や身分制、そして女性という観点から論を進めてきたが、ここに至って国家が人と人との繋がり積極的に介入してきたわけである。戦時期という非常事態の中であって、「ぜいたくは敵だ」「欲しがりません、勝つまでは」といったスローガンが掲げられ、国家統制の下で質素倹約を奨励しながら、一方で相互が監視し合うという点が特徴的である。そして、表面上は全国民が平等に相互扶助と協調を遂行することになり、生活面でも均一化が図られるようになったわけであるが、結果としてこれは従来のそれぞれの「世間」に国家規模の一元的、かつ強制的なルールが加わったことになる。こ

こに時代の閉塞感や息苦しさが噴出する契機が存在した。質素儉約や言動の制限は言うに及ばず、平等性や均一性、相互監視などが戦時下における日本国民を抑圧したことは疑いのない事実である。やがて時代が変わり、自由が謳歌できる現代社会にも閉塞感や息苦しさが存在するのは、佐藤も世間学の立場から指摘しているところである（佐藤 2023）。しかしながら、詳しくは第 4 章で論じるが、本稿の立場からするとそれらの発生要因を「世間」に求めることに対しては検討の余地があると考えている。

隣組の組長の業務についても附言しておきたい。東京では、實際上、半数以上の隣組で婦人が組長の仕事をしているだろうといわれ、男性は昼間に勤務をしている家族が多く、隣組業務の役割は主婦に向けられた、という指摘がある²⁹が、本稿の考察結果からしても、それは首肯できることである。本稿では、農村部や沿岸部の下位層、そして中間層でも主導権を握っていたのは女性であることが明らかにしたが、ここに戦時下における家族や地域との関わりに女性が負担を負う姿、すなわち男性よりも女性が「世間」と関わった（関わらざるを得なかった）痕跡を見出すことができる。従って、世間学においては「女性の世間」という視点は無視できないのである³⁰このことを今一度、強調しておきたい。

【註】

- 1 北陸大学紀要・第 55 号では、冒頭で第 3 章と第 4 章を第 56 号に掲載する予定であったが、各章ともに字数が膨大になったため、分割して掲載することとした。
- 2 宮本自身は、早くから西日本と東日本の相違を主張しており、「女の世間」でも、文章中に西日本にある地名（土佐、宇和島、豊後、吉敷郡など）が出てくることから、開放的な女性の一面は西日本の特徴であると言える。従って、東日本における女性の開放的な一面は定かではないが、「世間」に地域差が存在したことだけは確かである。
- 3 成田龍一『大正デモクラシー』（シリーズ日本近現代史⑥）、2007 年、岩波新書。82-83 頁。
- 4 下田歌子『婦人常識の養成』、1910 年、實業之日本社。
- 5 下田、前掲書（4）。144-145 頁。
- 6 下田、前掲書（4）。149 頁。
- 7 下田、前掲書（4）。152 頁。
- 8 ここで「衆」について附言する。第 2 章・第 2 節で福田アジオの「衆」に関する見解を抛り所に自説を補強した。福田は、「衆」は関西地方に存在し、村落組織や制度の中で特定の人数を表す場合に用いられる場合が多いことを指摘したが、「衆」は不特定多数を表す言葉としても一般的に用いられており、旦那衆は村落組織や制度の枠外の用語であるので一般的に用いられる言葉と解釈しても差し支えない。従って、福田の指摘した「衆」と旦那衆とは別物であると捉えている。（福田アジオ『番と衆－日本社会の東と西』、1997 年、吉川弘文館。99-100 頁。）
- 9 作詞：星野貞志（サトウハチロー）、作曲：古賀政男、歌：杉狂気児・美ち奴。
- 10 作詞：山野三郎（サトウハチロー）、作曲：北村輝、歌：林伊佐緒・新橋みどり。
- 11 井上寿一『昭和前期の社会 1926-1945』、2011 年、講談社現代新書。5-8 頁。
- 12 吉見俊哉『親米と反米－戦後日本の政治的無意識』、2007 年、岩波新書。46 頁。
- 13 E.H.キンモンズ『立身出世の社会史－サムライからサラリーマンへ』（広田照幸・加藤潤・吉田文・伊藤彰浩・高橋一郎、訳）、1995 年、玉川大学出版部。
- 14 鈴木貴宇『＜サラリーマン＞の文化史－あるいは「家族」と「安定」の近現代史』、2022 年、青弓社。54-63 頁。

- 15 「而して其の入質者の多くは中以上の筋にありて、職人又は車夫等の下等社会には出入りとても却てか皆無なりと。」(報知新聞)とある。(加藤秀俊・加太こうじ・岩崎爾郎・後藤総一郎『追補 明治・大正・昭和世相史』、1967 年、世界思想社。135 頁。)
- 16 鈴木、前掲書 (14)。62 頁。
- 17 鈴木、前掲書 (14)。107-108 頁。
- 18 前田一『サラリマン (ママ) 物語』、1928 年、東洋経済出版部。6 頁。
- 19 成田、前掲書 (3)。11-14 頁。
- 20 成田、前掲書 (3)。12 頁。
- 21 ここで、旧中間層の女性に言及しておきたい。文化人類学者の川田順造は、深川の「下町女」(深川女)について、「内助の功などというイジイジしたものではない。実際におかみさんや娘たちが先立ちになって、さっさとやってしまうのである。」と記す。この記述から、旧中間層の女性も主導権を握っていたことが窺える。(『江戸＝東京の下町から一生きられた記憶への旅』、2011 年、岩波書店。29-33 頁。)
- 22 吉見俊哉『都市のドラマトウルギーー東京・盛り場の社会史』、2008 年、河出文庫。225 頁。
- 23 吉見、前掲書 (22)。225-226 頁。
- 24 吉見、前掲書 (22)。233 頁。
- 25 吉見、前掲書 (22)。249-250 頁。
- 26 吉見、前掲書 (22)。250 頁。
- 27 成田龍一『近現代日本史との対話ー戦中・戦後ー現在編』、2019 年、集英社新書。82 頁。
- 28 渡邊洋吉『戦時下の日本人と隣組会報』、2013 年、幻冬舎ルネッサンス新書。18 頁。
- 28 藤井忠俊『国防婦人会ー日の丸とカップウ着』、1985 年、岩波新書。202 頁。
- 30 戦後の「女性と世間」については、社宅や企業城下町が「狭い世間」を構成した可能性があるが、第二次産業の衰退に伴い企業城下町も衰退したという通説に従えば、戦後の一時期に「狭い世間」が存在したが、これも衰退の一途を辿ったと言えよう。

【主要参考・引用著書】

- ・阿部謹也 (阿部 2003) : 『日本社会で生きるということ』、2003 年、朝日文庫。
- ・阿部謹也 (阿部 2004) : 『日本人の歴史意識』、2004 年、岩波書店。
- ・阿部謹也 (阿部 2006) : 『近代化と世間』、2006 年初出、朝日文庫。
- ・井上忠司 (井上 2007) : 『世間体の構造』、2007 年、講談社学術文庫。
- ・今枝法之 (今枝 2014a) : 「「世間学」再考」、『現代化する社会』所収、2014 年、晃洋書房。
- ・今枝法之 (今枝 2014b) : 「現代化する「世間」」、『現代化する社会』所収、2014 年、晃洋書房。
- ・佐藤直樹 (佐藤 2023) : 『なぜ、自肅警察は日本だけなのか』、2023 年、現代書林。
- ・宮本常一 (宮本 2005) : 『忘れられた日本人』、2005 年、岩波文庫。
- ・宮本常一 (宮本 2007) : 『庶民の発見』、2007 年、講談社学術文庫。
- ・柳田國男 (柳田 1976 上) : 『明治大正世相史・世相編 (上)』、1976 年、講談社学術文庫。
- ・柳田國男 (柳田 1976 下) : 『明治大正世相史・世相編 (下)』、1976 年、講談社学術文庫。
- ・柳田國男 (柳田 2017) : 『都市と農村』、2017 年、岩波文庫。
- ・横山源之助 (横山 2004) : 『日本の下層社会』、2004 年、岩波文庫。